

第12回
俳句コンテスト
小松ビジュアル

入賞
作品集

第12回 小松ビジュアル俳句コンテスト概要

○募集内容 「俳句」と「写真または絵」を組み合わせた作品（ビジュアル俳句）

○募集期間 令和6年9月30日（月）～令和7年6月27日（金）

○選者 「小松・芭蕉・一般の三部門」
写真俳句連絡協議会

織作 峰子（写真家）
まどか（俳人）

「高校生以下の部」
小松俳文学協会

「国際俳句の部」

木村 聡雄（国際俳句協会事務局長）

○募集部門 「小松」の部（テーマ…交流）

「芭蕉」の部（テーマ…旅）

「一般」の部（雑詠）

「高校生以下」の部（雑詠）

「国際俳句」の部（雑詠）

○応募総数 「小松」の部……………124点

八三六點 「芭蕉」の部……………256点

「一般」の部……………333点

「高校生以下」の部……………78点

「国際俳句」の部……………45点

○後援 国際俳句協会

俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会

特選作品

森村誠一記念写真俳句連絡協議会 選

小松の部

八十日目

（神奈川県）

石仏群の静寂と「山笑う」の春の生命力を巧みに対比し、禅的な深みを感じさせる作品。「誰一人何も喋らず」という表現が石仏の無言の存在感を際立たせ、写真の静謐さと俳句の調べが調和しています。観察眼も鋭く、リズムも美しい。

〈講評 写真俳句連絡協議会

会長 中村 廣幸〉



誰一人何も喋らず山笑う

だれひとり なにもしやべらず やまわらう

黛 まどか 選

織作 峰子 選

（入選 森村誠一記念

写真俳句連絡協議会 選）

小松の部

嶋川 龍雄

（青森県）

最後の卒業生を見送って閉校となる学校。嬉しいことも悲しいことも共有してきた校舎をただの建物ではなく親しい友人のように捉えている。自分たちの姿が映るほどびかびかに磨き上げた廊下に感謝の気持ちと友情が溢れる。

〈講評 黛 まどか〉

閉校前にお世話になった母校への感謝の気持ちを含め、はちまき姿で廊下の拭き掃除をする子供たち。ピカピカの廊下には多くの卒業生たちが歩いた思い出の痕跡が見えてくるようです。廃校になるのはとても残念な事ですが、立つ鳥跡を濁さずの心は大切ですね。

〈講評 織作 峰子〉



閉校の校舎と共に卒業す

へいこうの こうしゃとともに そつぎようす

森村誠一記念写真俳句連絡協議会 選

芭蕉の部

阿部 紗羅

(東京都)

「花手水」という現代的な寺社の演出を俳句に取り入れ、「宝石箱」の比喩が美しさを的確に表現している。色彩豊かな写真と俳句の美的感覚が見事に融合した優秀な作品。現代的な感性と伝統的な俳句形式の調和が素晴らしい。

〈講評 写真俳句連絡協議会

会長 中村 廣幸〉



花手水紫陽花色の宝石箱

はなちようず

あじさいいろの

ほうせきばこ

黛まどか 選

芭蕉の部

柘植 雅一
(愛知県)

駅から外に出ると目の前が港だった。真鯨が干されている漁港は、いかにもローカル線の終点らしい情趣だ。一人旅がいい。しばらく港の周りを散策し、海を眺めたことだろう。終点を詠みながらもその先のストーリーを想像させる。

〈講評 黛まどか〉



終点は真鯨干される港町

しゅうてんは まあじほされる みなとまち

織作峰子 選

芭蕉の部

酒井 和平

(石川県)

まず、写真が素晴らしいです。朧の三日月と、微かに見える光跡は小松空港なのか飛行機なのでしょうか？想像を掻き立てるようなニュアンスを感じる写真です。俳句は比較的ストレートですが、きつと素敵な旅の思い出を作り小松空港をあとにされた事と思います。

〈講評 織作峰子〉



三日月が旅のフィナーレ小松便

みかづきが
たびのふいなーれ
こまつびん

森村誠一記念写真俳句連絡協議会 選

一般の部

坂爪 奈津子

(石川県)

高齢夫婦が綿飴を手に笑顔を見せて心温まる光景です。「古希の破顔」という言葉選びが秀逸で、人生を重ねた喜びを的確に表しています。さらに「春祭」の季語が効果的に働き、写真と俳句が見事に響き合う、完成度の高い作品となっています。

〈講評 写真俳句連絡協議会

会長 中村 廣幸〉



わたあめに古希の破顔や春祭

わたあめに こきのはがんや はるまつり

黛まどか 選

一般の部

古西純子

(石川県)

万緑を面白い視点で詠みダイナミックな一句になった。木の根元に立ったのだろうか、それを「万緑の底」と把握。断定したことではつきりと風景が見えてくる。作者は万緑に染まり、大樹と一体になっている。

〈講評 黛まどか〉



万緑の底より大樹仰ぎたり

ばんりよくの　そこよりたいじゅ　あおぎたり

織作峰子 選

一般の部

下村修

(神奈川県)

代掻き（しろかき）は、田植えの前に水田に水を入れて土の塊を砕き、土の表面を平らに均す重要な農作業だという話は聞いたことがあります。水を湛えた田んぼに映り込んだ青空の面も平行になるようにと慎重な作業の様子が伝わります。

〈講評 織作峰子〉



代掻ける田の面と空と平行に

しろかける たのものそらと へいこうに

小松俳文学協会 選

高校生以下の部

北川 桔梗

(岡山県)

涼やかなさくらんぼと額に見立てた薄緑の量感がぴったりはまっている。とても丁寧に細やかな作品である。句も御自身でなく「妹」の初恋を著した所が良い。「初恋」と「さくらんぼ」はつきすぎと評されやすいが、妹さんなので違和感のない一句。秀逸な絵と句が極上の作品になった。

〈講評 小松俳文学協会〉



妹の初恋はまださくらんぼ

いもうとの はつこいはまだ さくらんぼ

島中 あゆ

(東京都)

喝采のなか、大道芸の出し物もいよいよ最後となりました。
人だかりの広場からわきに目を向けると、すぐ近くの池の水面は穏やかで、大道芸の声や拍手が反響するばかりです。秋の深まりを象徴するかように、この賑やかさもまもなく夜の静けさに取って代わられようとしています。

〈講評 木村 聡雄〉



autumn dusk
street performer's last one
it's echoing in the pond

秋の夕暮れ
大道芸人の最後の演目
池に響いて
(本人和訳)

入選作品

黛まどか 選 小松の部



大酔啓子（石川県）

新雪に鳥来たるらしトトトトト

しんせつに とりきたるらし ととととと

織作峰子 選 小松の部



川合進（宮城県）

孫の愛額に受けて敬老日

まごのあい ひたいにうけて けいろうび

森村誠一記念写真俳句連絡協議会選 芭蕉の部

栗原 由郎（埼玉県）

天平の時とどむるや冬日和

てんぴょうの　ときとどむるや　ふゆびより



黛まどか 選 芭蕉の部



入江 清一（京都府）

花筏追ひつつ巡る京の旅

はないかだ おひつつめぐる きょうのたび

森村誠一記念写真俳句連絡協議会

選 一般の部

酒井和平（石川県）



パパ投げて！

僕はオオタニ五月晴れ

ぱぱなげて　　ぼくはおおたに　　さつきばれ

黛まどか 選 一般の部

覗かれてめだかの学校大騒ぎ



石川 昇（東京都）

のぞかれて めだかがっこう おおさわぎ

織作峰子 選 一般の部

井上靖 (神奈川県)

冬眠や高層ビルの開かぬ窓

とうみんや こうそうびるの あかぬまど





霜柱
shall we dance を
楽しめり

しもばしら
シャル ウィ ダンスを
たのしめり

肥本純二
(神奈川県)

小松俳文学協会 選 高校生以下の部

大野 未莉（東京都）

がまがえるなぞなぞをとくかえりみち

がまがえるなぞなぞをとくかえりみち



小松俳文学協会 選 高校生以下の部

森泉
(東京都)

いにしえのマンモス思ふかき氷

いにしえの
まんもすおもふ
かきごおり

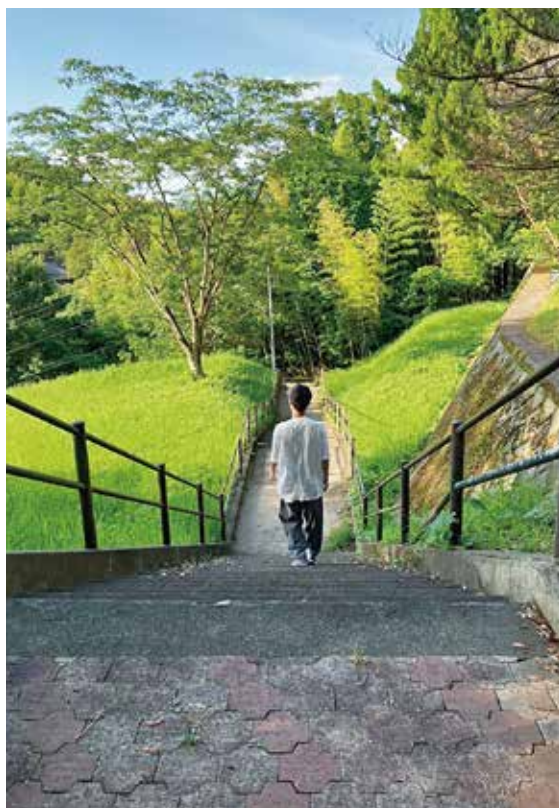


小松俳文学協会 選 高校生以下の部

大久保 茉奈（鹿児島県）

山滴る冒険後の帰り道

やましたたる ぼうけんあとの かえりみち





木村聡雄 選
国際俳句の部

Goran Gatalica (クロアチア共和国)

duboko ljeto—
na očevim rukama
miris tartufa (クロアチア語)

summer deepens—
on my father's hands
the smell of truffles (本人英語訳)

夏深まる—
父の手には
トリュフの匂い (木村聡雄和訳)



木村
聡雄
選
国際俳句の部

Ana Jovanovska (東京都)

day opens lid of night
to show view of countryside' s
stars starting to brew

昼が夜を開き
田園風景に
星々が
(木村聡雄和訳)



Ana Jovanovska (東京都)

climbing Fujisan,
came in contact with the gods
talking face-to-face

富士登山
出会った神々との
対話
(木村聡雄和訳)

第12回 小松ビジュアル俳句コンテスト

入賞作品集

発行日

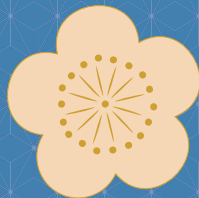
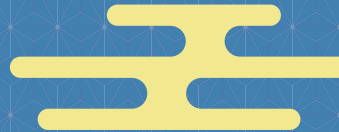
令和7年11月23日

発行

小松市 国際文化交流部 文化振興課
〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地

印刷

木場フォーム印刷株式会社



石川県小松市